
ウェルトリエル

松山 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウェルトリエル

【Zコード】

Z0615E

【作者名】

松山 豊

【あらすじ】

四肢のないが、心が豊かなりエル。美しい容姿をもつ姉のウェル。その姉妹が探しているのは、「母親の音楽」。各地を巡り、二人は人の弱さ、脆さの中に、人の強さを知り、多くの音楽に触れていく物語。

第一話 「美しい人々」

「美しい人」

門に手を添えた。

木製の古い門で、朝日に照らされてはいるが、しつとりとした湿り気があり、その手触りはヒンヤリとして冷たい。それは、朝露を乾かすような清風のせいなのかもしないが、しばらく手を添えていると、徐々に暖かくなつていくのが分かつてきた。

両手でそつと押し開けていく。

木と木が擦れて鼓膜を搔くような古い音が静かに鳴るが、それでも滞りなく、門は開いていった。

市場、だろうか。早朝だというのに、人がわんさと群れている。実際に楽しそうに声を張り上げて、商売をする露店が所狭ましとならんでいた。

リュックに納まつた少女は目を輝かせ、ジタバタと暴れずにはいられない様子である。

「うわああ…！ とてもぎやかだねえ！ あ… ウェル、ウェル！ あっちから食べ物のにおいがっ！」

くんくん…くんくんくん！

少女は、リュックから身を乗り出して匂いを必死に拾つてている。

「…リエル、そんなに暴れたら落ちる…。」

鼻をヒクヒクと動かす少女の後頭部辺りから、透き通る声がした。忠告のようで、どこか言葉には心配の色がある。声の主の整つた顔は無表情で、冷たく、まだ若い。

紺青の長髪に、紺青の瞳。

冷静沈着な印象を与える、病弱そうな顔立ちである。真っ白な長袖のワンピースに袖を通し、その袖はコラコラと上品に揺れていた。ウェルと呼ばれた麗人は、胸元にさげたリュックに、先ほどから忠

告を無視して匂いを拾い続ける妹をぶら下げていた。

妹の名はリエル。リュックから顔だけを突き出して、姉と同色の短い髪を振るつて、元気にはしゃいでいた。活気に溢れる市場を見る瞳は大きく、紺青色で、どこか小動物のような愛しさを持っていた。

「…リエル…本当に落ちるよ…？」

ウェルの一回目の忠告である。

リエルは鼻を動かすのをやめると、つまらなさそうに唸つた。
「むう…落ちないよ…ウェルはすぐそういうことこうんだから…」

「

「…この前は落ちた…」

そう反論が帰つてくると、リエルは言葉をつまらせ、短く切った襟足をピイツとひるがえして、ふくれ面になってしまった。
面白くない、ウェルなんか嫌いだ。

言葉にしなくても、リエルの顔にはそう書いてあつた。

ウェルは、人ごみに向かつてスルスルと歩み始めた。胸元にさげたリュックをグイツとかけなおし、拗ねたりエルを無視するように活氣盛んな市場に溶け込んでいった。

再び、食欲をそそる香りがリエルの鼻をくすぐつたのは、それから間もなくのことである。

「あああー！ ウェル、ウェル！ あつちー！ あつちから食べ物のにおいがつ！」

悲壮な表情で再び訴えたが、ウェルの足取りは無関心に別の方角へ進み続けるばかり。リュックの中でリエルは子供のように癪癩を起し、高い声でピーピーとわめいた。

「ちょっとウェル！ 無視しないでよー！ ウェルのバカ！ 鈍感！

鬼！ おなか減ったよう…！ はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、はやく食べたい！」

「リエル…まずは宿が先…お昼はまだ…」

あまりに激憤するリエルに、冷静にあやす口調でそう云つたが、聞く耳を持たない。

「宿なんか後でいいよ！ほら！先にこじ飯食べなくちゃ！ああ匂いが…消えていくよ…ハムサンドが…ハムサンドが…」この世の絶望を一驚に引き受けた。

いまのリエルなら云いかねない一文である。ウェルの胸元がおとなしくなったことが助けたか、宿を午前中に見つけることができた。もつとも、その建物が宿と名乗れるのかは、甚だ疑問でしかなかった。

宿はこの町の一番奥にあった。

一軒家の小さな宿である。

小汚い。この一言に尽きる独特の色を持つている。それはリエルの空腹感も、憤りも書き消すほどである。

ウェルはいつでも冷静であるから、特に問題ないという相貌を崩さない。リエルがどんなに嫌がろうとも、ここにしか宿はなかつた。また探しにいくのには、時間が無い。

背に腹は変えられない思いを胸に、宿の扉を開けると、ウェルのヒザにも満たない小さなカウンターが正面にあった。

「おー、いらっしゃい。」

カウンターには小人が座っている。

彼は機嫌よくヒゲを搔き鬯つて、声をかけてきた。どうやら宿屋の店員らしい。

この小人をよそに、高すぎる天井をリエルは仰ぎ、綺麗に掃除された室内に感激の声をあげた。外からは想像もしない、真っ白で埃の一つを見つける方が大変そうな室内である。

店員はケタケタと笑い、小さなカウンターを飛び越えると、二人の前にチョコーンと立ち、二頭身の体を丁寧に折つてお辞儀をしてきた。

「ようこそ！この街一番の宿屋へ。」

「ど、どうも。」

リエルはどうぞして返事をするが、ウェルの身長が高すぎて店員の顔が実はよく見えなかつた。

ウエルはヒザを折り、店員の顔が見える高さに落ちつくり、淡々とした調子で、あの透き通った声を発した。

「あの……この宿主ですか……？」

「んあ？　ああ。そうだが？」

「……よかつたら……一晩泊めていただきたいのですが……。」

「なにいつてんだい！　泊まるための宿だらうが！　泊まつていかな！　いい部屋は早いもの勝ちだぜ！」

小さい体を左右に振りながら、店員は会談に向かってテケテケと走り出した。体の半分ほどもある階段を飛び跳ねてのぼり、振り返ると、

「オラオラ！　早く来なつて！　案内するよー。」

小さな体にマツチした腕を、パタパタと素早く羽ばたかせて手まねきした。店員は再び背をむけ、ピヨンピヨンと跳ねていく。

「なんか、面白い街だね、ウェル。」

「……うん、面白い……。」

急ぐわけでもなく、一段一段、一人は靴音と共に上がつていった。

「オラ。この部屋が一番上等だ。値段も他の部屋と変わりはしねえよ。ここがお勧めだぜ。」

階段を上つたすぐそこには開け放つた扉があり、外観からは想像もつかない雅やかな部屋が広がっている。

店員は自慢げに腰に手をあて、鼻を鳴らして開け放つた部屋の前に立つていた。

四人で泊まる事は容易だろう。そんな期待を抱くことに違和感を覚えないくらいに、部屋は大きかった。

リエルとウェルが一緒に寝てもゆつたりしているベッド。湯船のついた浴室。鼻をくすぐるようなハーブの香りが、気にならない程度に施されている。感激してリエルは甘いため息をつかずにはいられなかつた。

「す……すごい部屋だね。」

「で？　どうするんだ？　泊まるか？」

リエルとウヘルの答えは決まっていた。

顔を見合させて頷く。鋭い目つきを店員に突き刺すと、二人は同時に声を合わせた。

「宿代はいくら？」

宿が決まった二人は荷を置いて、日の高くなつた市場に、再び足を運んでいた。

荷、といつても、ウェルの持つていたギターケース。それだけしかなかつた。金はリエルが管理しているので、荷のうちに入ることはない。

市場は変わらぬ活気に包まれていた。それもそのはずだ。今は昼飯時である。リエルの好む香りで、周囲は覆い尽くされていた。

「いやー…やつと来れたね。もつお腹ポコボコだよ…」

ポコポコつてなに？

常人である人なら触れずにはいられないところだ。しかし、ウヘルにはそんなものは通用しない。悲しいかな、そのような感情は持ち合わせていないうらしい。

「あ、ポコポコつてのはね、ペコペコよつペコペコつて意味で

……

「」のように、リヘルは自分の考案した奇形語を解説する現状に満足するしかない。

それでもリエルは上機嫌で、縁日の露店を回るよつにはしゃいでいた。お皿当てのハムサンド（食べ物。肉に粉末状の小麦が挟まっている。）を発見した時には、もう手がつけられない。ウェルは、暴れ馬の如く乱れるリエルを前に、ハノ字に眉をひそめることもなく露店の店員に声をかけた。

「…すいません…。」

「はいよお！」

店員には皿が三つあった。特にどうとこうわけもない、といつもうにウェルは一枚ハムサンドを購入した。

「毎度あり！」

店員は親切にハムサンドをウェルに手渡してくれた。しかし、額に位置する眼球だけがギョロギョロ休むことなく動き、他の客をとらえては店員の顔をそこにいたりなっていた。

「うまあい…」

リエルは今、幸せの絶頂である。

なにがうまいのか。当然、ハムサンドだ。

もちろん一枚ともリエルの腹に納まつた。その間、ウェルは黙つてリエルの手となり、ハムサンドを食べ易い位置に運んでやつていたのは云うまでもない。

リエルが一枚のハムサンドを食べ終えるのに、そう時間は掛からず、ウェルはいまだに腹をひねるよつないい香りが漂う市場を歩いている。

「はあ…美味しかった！ 次は何を食べようかなあ…」

「……まだ食べるの…？」

リエルの指揮の下、二人は次なる店に顔を出した。

「はい！ いらっしゃい！」

今度は、四本の手がしきりに仕事をこなしている店員に出会つた。一本は素早く肉を焼いている。

もう一本はその肉を挟む葉を構えて、あと一本の腕で肉を切りわけていた。

「うちのステーキはうまいよ…」

リエルとウェルを目にした四本の腕を有する店員は、商売用の高い声をだした。

すかさずリエルは、リュックから落ちそつになりながらも、輝いた瞳で『ステーキ』なるものに注目した。

「うわあ！ なにこれ、なにこれ！ すごく美味しそうなにおい！」
店員いわく、『ステーキ』なるものは臭い肉を使用するため、肉だけを食べると吐き気をもよおすらしい。そのため、ハーブで挟んで食べるわけだ。

「えー？ いんなに美味しそうなのに？ お肉だけじゃ食べたらダメなの？」

一度思い立つたリエルの考えを変えるのは、恐らくこの世界の秩序を激変させることよりも難関である。

それをしてよく知つてか知らずか、ウェルは黙つたままリエルが店員に頼み込んで肉を取引する様子を窺つていた。

肉を受け取り、ウェルはリエルが食べ易い位置に肉を運び、リエルの大きな口がそれを

ほおばつた。

後にどうなつたか。

云うもおぞましい。

悲惨で、えげつない結果になつた。

リエルの入つたリュックが使い物にならなくなり、新しいリュックを買つハメになつた、といえば想像がつくだろう。

「ひ…ひどい目に…あつたよ……」

ピカピカのリュックに身をおいたリエルは、青くなつた顔色でガクツと肩を落としていた。

「…自業自得…」

相変わらずウェルは冷たい。

舌治し、といった具合でリエルは憲りずにウェルを指揮し、他の店へと向かうのであつた。

「…まだ食べるの…？」

次は『たこ焼き』と看板を掲げた露店である。

「おっちゃん！ たこ焼きちよつだい！」

「元氣いいねえ、おチビちゃん！ 一個オマケだ！」

大喜びして『たこ焼き』とやらの出来上がりを待つていてリエル。

『たこ焼き』の店員の調理する一本しかない腕の調理さばきを飽くことなくジッと見続け、今回はしきたりどおりに『たこ焼き』にタレをつけて食べた。

先ほどの『ステーキ』の一の舞になつては敵わない。

とはいっても、店員によれば、『たこ焼き』は卵にたこが入つているだけで、タレをつけなかつたところはどうなる、という事はない。そうだが、リエルは断固としてタレベタベタにつけて食べた。

それからも、リエルとウヘルはこの珍味にあふれた街を練り歩き、夕暮れまで食べ歩いた。店員は多くの者が、やはり何かが欠如していたり、多かつたり。特殊な人種が多く見られた。

中には醜い姿の住人もいたが、そんなことはどうでも良くなるほど、

この街の住人は、暖かくリエルとウェルを迎えてくれたのである。日が落ちる頃には、酒場に行くことを約束するにまで、リヘルとウエルは仲がよくなつていた。

「いやあ…まさか今晚一緒に飲むことになるとはねえ。面白くなつてきたよお。」

リエルは満腹感からか、その笑顔はいかにも楽しげで、ワクワクし、真新しいリュックを揺らしていた。

宿までの帰路をじつくりと歩き、リヘルとウェルは瞬く星を見上げた。

リンリン…。チリチリ…。

鈴の音のよつた星が、いつも夜空にある。

この空を眺めていると、リエルとウヘルはよく考へる事があつた。それは昔のこと。

母親のことである。

空の下で、今も生きているのだろうか、と取り留めのない考へが浮かんでくる。その都度、連鎖して思い出すのは、優しかった父親の言葉だった。

「いいかい。ぼくも、お母さんも。皆ひとつなんだよ。木も、水も、風も、雲も、犬も、猫も…。皆この一つの命とつながつてできているんだ。決して独りだなんて思わないでね。もしもつらくなつたり、嬉しいことがあつた時、そのときは、お星様に言えばいい…。きっ

と、黙つて聞いてくれるよ。」

父は戦争でこの世を去り、母は一人を捨てた。結果、二人はこうして旅をしている。

ギター・ケース片手に、音楽を生業として旅を続いているのだ。今まで訪れた街、国は数知れない。いま訪れた街も、そのうちの一つなのである。

その晩、一人は招待された酒場に足を運んだ。リエルとウェルが宿をとった、すぐそこに酒場はあった。約束の時間は夕刻。すでに日はしづみ、海の中に身を投じたように、冷たく暗い空気がただよっている。その中に、一際目立つやんわりとした光を放つ酒場。外に漏れるのは、時おりふらつくランプの柔軟な明かりと、人々の楽しそうな歌声、笑い声である。

扉を片手で押し開けると、そこには市場で見かけた店員がたくさんいた。

「おお！ 来たか、来たか！」

「待つてたぜえ！」

「こっち来て一緒に飲もうや！」

「ささつ！ こっちだ、こっちだ！」

片目しかない店員。

手が四本ある店員。

片手しかない店員。

目が三つある店員。

他にも、酒場が埋まるほどどの住民が、この酒場に来ている。座るところがほとんどないのである。

皆が入ってきた一人に手を振っている。

誰もが個性あふれる体系と、暖かい心をもつっていた。

招かれるままに一人は酒場の奥へと進み、用意されたテーブルに腰を下ろした。

ウェルは腰を下ろした際、リエルを胸元から降ろしてテーブル上

に置いた。絶妙なバランスで垂直にリエルは立ち、どこからか運ばれてきた自分とそう変わらぬ大きさの酒瓶に口をつけようとしていた。

「おい、おい。お嬢ちゃん、酒は飲めんだろうに。」

隣に座っていた毛むくじやらの男はそう力強く笑つたが、リエルは鼻をならして男を睨みつけた。

「なんだと！ これでも俺はウェルと同じ年なんだぞ！ 双子だぞ！ 酒くらい飲めるもん！」

にわかには信じられない子供の戯言のようだが、ウェルもウンウンと頷いてリエルの言葉が真実であることを、ウェルなりに意思表示していた。

毛むくじやらの男も含めて、近辺にいた住人は口に手をあてて驚いていた。

「なんと！ 本当なのか！ こりやたまげたよ……。」

驚かない方が不自然である。

なにしろ一人は似ても似つかないのだから。それにここは盛会の場である。驚きはやがて笑顔に変わり、リエルとウェルも酒を口にし始めた。

リエルは一口含んだ次の瞬間には酔いがまわっている様子だった。フラリフラリとリュックに納まつたままの体で、テーブルを危なつかしく動き回る。だが、たいした距離を移動するわけではないので、危険度も知れたものであった。

一方ウェルは無心に酒を飲み干していく。顔色一つ変わらない。

グビグビ。ゴトン。

「おかわり……」

「おかわり……」

機械的にその作業を繰り返し、周囲の驚きの視線を集めていた。

ウェルはそれからも次々と酒を胃に放り投げていったが、一向に酔いがまわる様子はない。

笑い声が、四方八方から飛び交う。

手を叩く音。話し声。

シワくちゃの顔。笑顔が笑顔をつないでいく。リエルもその中に交わり、テーブルの上で上機嫌に踊った。手拍子に合わせてクルクルクルクル…。

回つて回つて、心も踊る。一人、また一人と席を立ち、一緒になつて踊りだす。それを見た人からまた、笑顔がこぼれてつながっていく。

「ウェル、ウェル！　あれやつて、あれ！」

そう聞き取つたウェルは飲んでいた酒を乱暴に置くと、平静を保つた顔とは裏腹に、おぼつかない足取りで酒場を出て行く。

「おや？ リエルさん、ウェルさんはどこにいったんだ？」

一つ目の住民が首をかしげた。それにつられて数人、同じように首をかしげる。

「ああ。ギタークースとりにいつたんだよ！」

確信をもつてリエルはそう云つた。しばらくすると、本当にウェルはギターケースを携えて、フラフラしながら帰ってきた。あまりに不安定なので、何人もの住民が手を貸そつと立ち上がる。

「…ろつてりたよ…リイル…」

どうやら一応酔つているらしいことが住民にもわかるほど、ウェルの舌は動いていなかつた。そんなウェルの姿を見ても、なお楽しそうにリエルは踊り続けていた。

ウェルはドカリと椅子に座り込むと、ギタークースを開け放ち、ギターを取り出した。住民の中にはギターを見たことが無い者もいるようで、物珍しそうに眺め、どよめく。そんな住民のどよめきを無視して、ウェルはそつとギターを華奢な足の上に置き、美しい姿勢で構えた。瞳を閉じる。

ウェルの指先が弦を叩き、軽快なギター音が店内に広がつた。

リエルのダンスもより軽やかになり、周囲の人々を巻き込んだ。あちこちからの歓声は、より店内の温度をあげていく。

床が抜けるのではないかと店主が危惧するほどに、総立ちで皆が踊りだす。

どこからともなく、耳に届きやすい笛の音が入り込んでくる。それはより人々の心を躍らせるリズムを刻んでいる。

すると今度は机を叩く豪快な太鼓が鳴り始める。机を叩く太鼓のリズムに、細い棒を立てて叩いたような音が入つてきた。

「たのしー！」

楽しさのあまり、リエルは叫んだ。

人々は手をつないで回ったり、小刻みに弾み、肩を組んで横に揺れたり、手を組んで足を右へ、左へ！

机に乗つた男女が一緒に回つては笑い声をあげる！

そうでなくとも、笑い声は常に耳に入つてくる！

店内は「ちや」「ちや」と蠢く人でいっぱいになつた。

たのしい。気持ちいい。もつと踊ろう。

もつと笑おう！

外の星はしづかに瞬いて美しい。

宴は夜が更けてもなお続く。

静まり返つたのは、もう東の空が明るくなつた、朝の兆しを迎える頃であった。

人々は、思い思いに寝つ転がり、気持ちよさそうな顔だ。

その中に、あのリエルの幼い顔も、ウェルの整つた顔も、実に自然に紛れ込んでいた。

誰かが自分を抱きしめていた。細く、長い腕。纖細な指。嗅ぎ慣れた髪の香り。

自分が入っていた、買つたばかりのリュックは脱がされ、代わりに

シルクのような長い髪が自分にかけられているのが分かり、自分は今、あの宿屋の綺麗な部屋のベッドにいるのだということにふと気がついた。

リエルはまだまだ開ききらない瞼で、自分を抱きしめている人物を見上げた。予想はついている。よもや男とは思えない。

そこには、整いすぎたウェルの寝顔がやはり在った。静かに寝息をたてて、ヨダレを垂らすこともなく、見本のような寝顔だ。長い前髪がレースのようになり、誰でもこの芸術的な美に見とれてしまうことだろう。

そんなこの上ない美麗な顔も、リエルにとつてはただの姉の顔でしかない。

なんだ、ウェルか、と安堵して、再び眠りの世界に入していくのだった。

窓が開いている。

それはウェルが早朝に帰ってきたときを開けた。宿につくなりウェルは、リエルをリュックから出してやると、途端に胸に抱え込み、ベッドに身を投じた。

リュックはベッドのすぐ脇に無造作に放置されている。

暖かな風は、開け放った窓から、心地いい間隔をあけて、それを見計らうように通りぬける。

二人の髪を揺らし、肌を撫でて安らぐ。

ウェルの軽く長い髪は、徐々にリエルの体から解けるように退き、その体全体をあらわにしていく。

肩から下、腕はない。

股の付け根から、足はない。

つまりリエルには、四肢がない。

それぞれの末端には、白い包帯が幾重にも巻かれている。痛々しく見えるが、リエルには痛みはない。あるいは、四肢がないという事

実。リエルがリュックに納まる理由が、ここにあった。

しづまり帰った街の早朝。その街の宿で、二人は同じテンポで寝息をたてている。抱き合って、安堵した表情で。

ウェルが目をさましたのは、日もすっかり昇り、街ににぎやかさが戻った昼だった。リエルが目を覚ますまで、ウェルはリエルの小さな鼻を、ツンツン、ツンツンと突付いて遊んだ。くすぐつたいのか、それとも止めてほしいのか。リエルは何度も眉をひそめ、唸るだけで、なかなか目を覚ます事はないのであつた。

リエルが目を覚ましたのはそれから数刻たつてからだつた。遅めの昼食をすませると、二人は明日の出発の準備をしに夕方の市場へと向かう。昨日の酒場にいた顔ぶれがそこにはあり、他愛もない世間話を交えると、大抵の者は旅立つ一人に何かしらのサービスをしてくれた。おかげで、もう一つ荷物用の鞄を買うことになった。それだけの大荷物なつたのである。

「おお！ リエルにウェルさんか。荷物、大変そうだな。」

そう話しかけてきたのはあの毛むくじやらの男だつた。酒屋でウェルの隣に座つていた男である。男はライド（四輪で、原動機が装着された乗り物。太陽の光をエネルギーに変えて走る。）の整備を生業にしていた。

「……そんなことない。」

強がりなのか、本当にそうなのか、ウェルの相貌から読み取る事はできない。しかし、他人から見れば、ウェルの担ぐ荷物は重そうに見える。例えるなら、出産したての主婦が、子を胸元にさげて買物の大荷物に息を切らしている。そんな光景に見えてしまうのである。

毛むくじやらの男は、昨日と同じく豪快に笑つて腹を叩き、ちょうど男のすぐ後ろにある旧式のライドをクイッと顎で指した。

「どうだい？ あのライド、安く買う気はないかい？」

「え！ 本当！」

耳寄りな情報に身を乗り出したのはリエルである。再び毛むくじ

やらの男は豪快に笑つた。

旧式とはいっても、整備されていいので形はいい。タイヤも特注品をつかつてゐるらしく、ちょっととやそつと交換せずともいい。それは簡単に言つてしまえば、掘り出し物の中の掘り出し物だった。

それを、この毛むくじやらの男は、ハムサンドを買うよりも安く売るというではないか。リエルが驚かないはずがない。

「本当にこの値段で売るのか、おっちゃん！ 後でやつぱり十倍払つてくれつて言われても、俺たちそんな金ないよ？」

何度も確認をとるが、毛むくじやらの男はそんなリエルを笑い飛ばし、ライドをハムサンドよりも安く売つたのであった。

「じゃあ、リエル、ウェルさん。街を出るときにまた言つてくれ。そのときは見送るからよ！」

あまりに安く買ったので、一人には買つた実感がわかなかつただろう。リエルは言った。

「な、なんで皆俺たちにそこまで優しくしてくれるんだ？」

毛むくじやらの男は、鼻で笑い、「決まつてゐるじゃねえか…」と続けた。

「二人が俺たちを愛してくれたように、俺たちも、リエルとウェルさんを愛しただけだよ！ 俺たちには、それしかできないからな。」

翌朝、リエルとウェルは朝早くに身支度を済ませた。出発の準備はできている。朝日がようやく昇り始めて、しづかな街から、二人はその日、出て行くつもりだった。

宿での最後の朝食。

小人の店主は、「あのよ…」といにくそうに鼻をかいだ。

「…もしよかつたら、なんだが…ここに住むつもりはないか？」「え？」

口に料理を含んでいたリエルは仰天した。が、口から料理は微塵も落とさなかつた。

「この街の人間は、あんた達の事を気に入つてゐる。俺もそつだ…」

ここで働いてもらつてもいいし、それが嫌なら、一人でこの宿に住めばいい。」

小人の店主は真剣だった。リエルもウェルもまじめに話しに耳を傾けた。

「あんたらのあの音楽を聴いて楽しくなつた。それは本当なんだ。だから、この街の音楽家になつてもらつてもいいと思う…だから…」「すいません。」

笑顔でリエルは咳いた。小人の店主に満面の笑みを見せると、「いい話だけど…俺たちは、まだ旅をしないと、旅をしたいから。もし、いつかどこかに住もうか考えたときは、迷わずここに帰つてくるよ。」

ウェルは黙つて料理を自分の口に運び続けた。その食器の音よりも大きく、リエルは店員は笑い、お互に納得して一回、頷いたのであつた。

街にある出口も、入り口も、最初入つてきたあの門一つしかない。朝、街の住民は、リエルとウェルが旅立つことを知つていて、多くの者が門の前に集まつていた。

「また来てくれ。」

「今度また、あんた達の音楽で踊らうー。」

「待つているわ…」

「元気でな？ 怪我、するなよ？」

「困つたらいつでも帰つておいで？」

まるでそれは街の子供を送りだすようであった。皆が皆、心配そうであるが、次にまた再会する喜びも、その顔ににじませている。門を数人の男が開けてくれる。

外には草原が青々と生い茂り、遠く離れたところに丘が見える。そこには木が一本立つていた。

「…それじゃあ皆、また、来るね？」

笑顔で、リエルは声をからした。こんなにも暖かな気持ちになつたのは何年ぶりだろうか。離れたくない気持ちが喉もとで暴れて、

痒くてたまらない。

ライドのキュルキュルと回る独特のエンジン音がなり、いよいよ別れはすぐそこにやつてきた。

「ま、また来るよー また来るからねー」

リエルの頬を、冷たい辛さが落ちていった。

ライドは無常にも走り出し、一人とその街の住民は別れを告げた。街の名前は『ケケラ』。そういつた。

ケケラの門が閉まり、一人を乗せたライドも、あの遠くにある丘までたどり着いた。ちょうど、丘に生えている一本の木の側で、ウエルの運転するライドは停車する。

「……リエル。 そろそろ出るよ……？」

「うん……」

リエルは名残惜しそうにケケラを見つめていた。ケケラの門が閉じている。初めてあの門を開けた時と同じ冷たい風が、やはり同じようにリエルとウエルの髪を遊んでいた。

ライドは丘を越えて、草原をさらに走つていった。しばらくいくと、目の前の青い空にひとつ、トンネルが現れた。ライドがやつと通れるほどの大きさのトンネルだ。ウエルはまっすぐにトンネルにライドを走らせていく。空はずつと続いているように見えていたが、ライドが速度を上げると、トンネルが徐々に近づいてくるのがわかる。

トンネルに入ると、人工的な白い光に包まれた。ぼんやりとした白い光。その空間を抜けると、ライドは広々とした機会音がうるさい空間に出た。

ウエルがライドのエンジンを切る。

すると、灰色をしたそのパイプだらけの空間に、音声が響いた。

「いやいや、お疲れ様です。どうでしたか？ 実に哀れな人間ばかりだつたでしょう？」

嬉々とした調子で、そのアナウンスは話すが、いまいちリエルもウエルも真剣に耳へ入れていない。聞いているのかもしれないが、

右から左へと流れていつてゐる、という様子だ。アナウンスは続ける。

「我が国では、あのような奇形物を、この施設に住まわしているわけですな。近頃奇形の人間がちらほらとでるのでね、この政策はまさに上策といえるでしょ。この施設は、そのような奇形物が住む街を体感することのできる施設なのですからね。ご希望に添えましたでしょ？」

ライドから降りたウェルは、そのまま頑丈なつくりであろう、パイプだらけの扉にむかつた。自動的に、扉が勢いよく開く。

先ほどとは一変して余計なものがない通路を抜けて、二人はケケラでもらつた荷物をしつかりと持つたまま出口へと向かつた。

「それではお二人様、二日の滞在で……」

出口の手前にあるカウンターで、二人は会計を済ませる。その額はハムサンドよりも安かつた。

出口付近に、三角形のメガネをかけた長細い男が、二口二口として立つっていた。彼がアナウンスの声の主である。

「いやいや、どうです？ 楽しかったでしょ？ 勉強になつたでしょ？ アレが我が国の誇る奇形物の街です！」

三角メガネの男は高らかに声をあげ、会計をすませた一人に近づいてきた。

どうやら一人に何らかの感想を求めているようである。

「どうでした？ つまらなかつたですか？ それとも、なにか御気に障りましたか？」

細い両手を広げ、二口二口粘ついた笑顔は崩れてはいない。はつきり云つて、三角メガネの男の声は耳障りに聞こえる。まるで耳をしつこくチクチクと刺されるようだつた。

そのおかげで、リエルはどうにも返事をする気にはなれなかつたのだ。そんなリエルの様子を察したのか、ウェルはあの無表情とか言いようのない冷え切つた顔で向き直り、「うるさい……。」とだけ言い残してとつとと外に足を運びだした。

三角メガネの男は引きとめようとしたが、すぐにため息を短く切つてしまつた。

ライドは既に施設の外に出されていた。ケケラで買つたあのライドである。

二人はライドに乗り込むと、静かなエンジン音を鳴らし、テテイの街をのんびりと走り回つた。

天気はいい。

ケケラで見た青空が、このテテイノ街にも同じようにある。ふと、街を歩く人々に目をやれば、そこには真っ黒な紳士服を着た男がいる。真っ白なスーツを着た女がいる。だれもかれも、ツンツと鼻を高く上げたように、気取つて靴の音を気にして歩いていた。互いに挨拶を交わすような事はない。ただそれ違い、時計ばかりを気にしている。その横を、一人を乗せたライドは通り過ぎていった。

テテイの街はどこもかしこも綺麗にされていた。住宅は赤茶色のレンガで積み上げられたものばかり。とくに大きな家は、巨大な石を削つてそれをレンガの代わりにして建てられていた。

どこをどう見ても、テテイとケケラの生活は異なつたものであつた。なかでも、テテイの住民がリエルを見るなり目を背けたのが、もつともそう感じた理由の一つだつた。リエル自身、そんな視線に気をつかうようなことはなく、ただはじめて乗るライドに静かな感激を覚えているようだつた。

ある住宅地に、ウェルがハンドルを切つたときのことである。例の如くレンガ造りの一軒家から、絶命したかのような女の叫び声が聞えてきた。

「ぎやあああああああ！」

何事が、と思わない者などいるわけはない。あつという間にその家の前には人だかりができていた。

リエルとウェルの二人も、すぐさま声のした一軒家の前にライドを停めた。

「なんだろう？　今のは声。」

落ち着て、リエルは一軒家を見上げてウェルに話しかけた。

「さあ……」

愛想のない会話の刹那、家から太つた紳士が出てきた。

太つた紳士は深々と頭をさげ、額にながれる汗を手にしたハンカチで何度も拭つている。一通り拭き終わると、額についた肉をブルブル震わせて話し始めた。

「いああ……あの、皆様。心配には及びません。私の娘、ジユリナに子ができたのでござります。ええ……子が生まれただけなのでござります。お騒がせして、まことに申し訳ない。どうぞ、お構いなく……お構いなく。」

人ばかりはつまらなさそうに散らばつていった。中には不敵に微笑む者もいる。

リエルとウェルの二人は最後の一人が立ち去つても、ジッとして太つた紳士を見ていた。

「お……おや？　お一方、どうぞお構いなく。どうぞ足をお勧めください。ささ、ささ。」

汗だくになつた紳士の額を、再びハンカチが拭つている。

すると、太つた紳士の後ろにある扉が開いた。出てきたのは黒いローブ着た女だった。ローブから長髪の藍色の髪が垂れ下がつている。手には

「い、これジユリナ！　まだ動いてはイカん！　申告にはワシが行つて来る！　お前は安静にしていなさい！」

手には、赤子がいる。いや、はつきりとは毛布にくるまれていて分からぬ。ただ、蠢き方、声から察するに、赤子である。

「と……父さま……私、自分で行きたいんです。自分で……自分で、この子を……」

「ならん……」

リエルとウェルがいるにも関わらず、その親と娘は口論を続ける。

「い……この子は……あのお方との子なんです……あのお方が遺して……遺

してくれた……」

「ジユリナ……だが……」

ジユリナと呼ばれる娘は、そのまだあどけなさの残る声を震わせていた。手にはしっかりと赤子を抱えている。かすかに、毛布の狭間から、子供の顔が見えた。

顔の半分が異形だつた。

晴れ上がりしているような、グロテスクに赤く大きい瞳だつた。拳よりも大きいだろう事が容易に予想できた。

不意に、太つた紳士はリエルとウェルに迫り、ウェルの肩を乱暴に押してきた。

「おい！ いつまで見ていいるつもりだ！ 早く消えろ！」

リエルは、憤慨した紳士に噛み付いて唾を飛ばしたが、ウェルはモタモタとした動きでライドに乗り込む。

「はやく行け！」

紳士は、ヤケクソになつたようにブルブル震えていった。

ライドが独特の回転音と共に唸る。

リエルとウェルの一人は紳士を睨みつけながら、その場から立ち去る。

リエルがバックミラーを見ると、ジユリナが必死に走つてくる。そのまま後ろには、あの太つた紳士が死に際の顔をしてジユリナを追つている様だった。

「わわっ！ ウェル、ウェル！ あの人走つてる！ 走つてきてる！」

リエルの声を聞くと、ウェルはライドのスピードを落とした。ジユリナの声が耳に入つてくる。

「待つて……！」

かすかにそう聞える。

「そこのライド！ 待つてください！」

ライドのスピードを更に落とし、ジユリナと平行させた。するとジユリナはあわうごとかライドに飛び乗ってきた。

「わわわっ！ あんた何やつてるんだよ！」

驚くリエルをよそに、ジュリナは怯えた瞳で小型の銃器を運転席にいるリエルとウェルに向かた。

「だして！」

ウェルは待っていたように、一気にスピードを上げた。ジュリナは赤子を抱えたまま、後部座席に叩きつけられる。すぐさま体勢を立て直して、ジュリナは赤子に怪我がないか心配な面持ちになつて、何度も赤子の頭を撫でていた。

ジュリナがゆっくりと振り向いた時には、あの太った紳士は跡形もなく消えていた。

さて、困つたことになつたのはリエルとウェルである。これでは立派な誘拐だ。リエルはできるだけ首を後ろに折つて、ライドがスピードを上げて街を駆ける音を聞きながら、懸命に叫んでジュリナに話しかけた。

「あんた！ なにしてるんだよ！」

「え…？」

ジュリナは困惑して、赤子と、小型の銃器を抱いていた。その姿は見るからに非力であつた。ジュリナは俯いて、しばし思考をめぐらせてゐるようだつた。その表情は、孤独の寂しさと、心細さがあふれだし、どうしようもなくか弱い。

見かねたリエルはどうしたものかと大きなため息をついた。

「ああ、もう…とんだ荷物を乗せちゃつたな…。」

「…うん。そうだね…」

二人の会話にジュリナは申し訳なさそうに肩を落とした。先ほどまでの勢いはどこへやら。手にしていた小型の銃器は、だらしなくぶら下がつてゐるだけだつた。

「しようがないな…ウェル、ひとまず、どこか路地裏に入ろう。ライドで走つていたら怪しいよ。かえつて田立つ。」

「…うん。わかつた…」

それから細い路地に入り、ひとまずジュリナを落ち着かせるように努めた。

路地には人の影はみえない。そこは暗く、昼間の暖かさを感じられない。隠れるには格好の場所である。ウェルはケケラで買つた大きな鞄の中から、手際よく水の入ったボトルを取り出し、フタを開けると、ジュリナに飲むように勧めた。

ジュリナは軽快して、ボトルを受け取らなかつた。

「……いいです、いりません…」

「……飲んで…。」

渋々、ボトルを空いた手に取つたが、やはり口には運ばない。三人の真ん中に、しばらくの沈黙が流れた。沈黙を破つたのは、ジュリナの水を飲む音だつた。

ボトルの中で、水がはじけて落ちる音が鳴る。

覚悟を決めた面持ちで、ジュリナは口を開けた。

「この子は…この子は…私と彼の、子供です…」

震える声だつた。俯いて、再びロープで顔を覆い隠し、手に抱える赤子をひしと抱く。

その肩は小刻みに怯えている。

「…手放すなんて…できるわけ…ありません。あの人が…残し…」

言葉は続かず、そこで途切れた。

ジュリナはしゃくりあげている。その嗚咽だけが空っぽの空間に流れていった。

それからいくらの時間が流れただろうか。ジュリナの弾んだ肩も落ち着きを取り戻し始めていた。赤子は反して大人しく、赤子独特の言葉を途切れ途切れに発している。その姿がとてもなく愛しく映えて、ジュリナをジワリジワリと励ましているようにも見えた。

ジュリナは再び、今度は落ち着いて話し始めた。

「…この子は奇形です…それはごまかしようがないです…。でも…私には、この坊だけが、彼とつながっている縄なんです。このテテイでは、奇形の子供は皆、あの施設に入るのが規則です…それが…

親のためであり、子のため…。そう教えられてきたんです。間違い、だとは思えません。ですが…」

「あんたが…」

リエルがジュリナの言葉に挟み込んだ。

「あんたがさ…どうしたいのか。それをハッキリさせてやらないと…。その坊やも安心できないだろ?」

「…リエルのいうとおり。」

ウェルが賛成した。

「わ…私は…」

「ほら、言ってみなよ? 内容次第じゃ、手伝わないわけじゃない。

暗かつたジュリナの顔に、希望を見つけた輝きが見えた。それはほんのわずかな、力のみなぎる兆しだった。彼女は歯を食いしばって、リエルとウェルに何度も頭をさげた。

何度も。

そして頭を上げたそのときに、一言。

「あの施設に、この子と一緒に…。」

無理難題。でも、俺でもそうするよ。

そうは思いつつも、リエルは冒険に出かける勇者のよつてワクワクとして笑っていた。

「…わかった。ウェル、手伝おう。」

「…うん。」

リエルはその後、策を用意していたようにツラツラと話始めた。

松明が灯されたあの施設の扉。

扉の前には、それほど巨漢でもない門番が、留守番をしていた。手には申し訳程度の攻撃力を感じる槍。それに松明が映つて、目を回してしまうような光を放っている。

一人の門番が大あくびをして、隣の相棒にケタケタと笑われてい

た、そのときである。

二人の門番の前に、深くロープを被つた女が、手になにやら抱えて歩いてくるのである。

ケタケタと笑う門番が、それに気がついた。

「おいおい、あっちからだれか来るぞ？」

「ええ？ どれどれ…」

ロープの主はシタシタと、ゆっくり歩みを進めてくる。肩のならかな具合を見る限り、女だろう。すらりとした体が、ロープをしていても見てとれる。

一般的に、美しい女。そう表現した方が理解し易い女だった。

「…すいません。」

門番に近づいたロープの女は、ポツリと云つた。

それは孤独になれた、冷たい人形の声のようだった。門番達はヒヤリと背筋を冷やして、一步、その女に近づいた。

「な…なんでしようか？」

「Jの施設を見学なら、明日の朝に来てくれ。今日はもう閉めている。」

女は押し黙つたまま、その場に冷たく立つてゐる。聞いているのか、聞いていないのかどうかも分からぬ。本当に、人間なのかさえ、疑わしくなるほどだ。

「お、おい…。なんとか言え。」

「そ、そつか。お前この街の住人か？」

一人の門番の声に、ゆっくりと、じっくりと女は頷いた。

「な…！ ジヤあダメだ、ダメだ！」

「Jの施設は、他国者の見学用だ！ 自国の者がはいることは許されではない！」

「それに女。その手に持つているもの…。まさかとは思つが…」

「…まさか、奇形の赤子か…？」

門番が手をのばして、女を捕まえようとしたが、ロープの裾はヒラリと舞い、羽ばたくように音を立てて女の逃げる軌跡を追いかけ

た。

女は背を見せて走り出していたのである。

二人の門番はすぐさまその女を追いかけた。

追えども、追えども、女には不思議と追いつけない。女が街の角を曲がれば、見失つてしまふのではないかと思えるほどであつたが、角を曲がつた女は壁に手をついて息を切つていた。

しめた。門番の二人は月明かりで女を追うが、再び女が走り始めると、やはり女には追いつくことができない。

その日は月光が幻のように美しく、いつもは暗い路地を照らしていた。影が影を追いかけて、その影はつながらない。

なかなか、つながらず、ローブの女と門番はずいぶん遠くまで走つた。

ある角を曲がつたとき、とうとうローブの女は行き止まりに差し掛かってしまった。角を曲がるたびに壁に手をついた息を整えていた女、のはずだつた。しかし、女は行き止まりの壁を背にして、置物をおもわせるように、ピクリと動くことはない。

息をハアハアと荒々しくあげる一人の門番が、勝ち誇つた顔でニヤリと笑う。

「ハア…ハア…なんでこいつこんなに早いんだよ…ハア…」
「だ…だが、もう逃がさんぞ…ハア…」

二人の門番が、ほんのわずかに田を離した刹那。ローブがふわりと舞つていた。

女の姿は、ない。

空にある月のすぐそこにある大きな建物にある、影。長い髪が横に大きくなびいている。髪、のはずである。シルエットから、女はまだ手元に何かを抱きしめていた。

「…これで…大丈夫。」

女はそういった。小さく囁き、手元にあつたものを投げ捨てた。門番達の元にゴトリと鈍い音がなり、「ゴロリと転がつてくる。

「お…！ お前なんてことを！」

駆けつけると、それは木で作られた小さな丸太だった。それが毛布でくるまれている。

門番たちが弾かれたようにあの女を見上げるが、そこにはもう、空っぽになつた空に風が通つてゐるだけだった。

「ウェルのやつ、うまくやるかな…」

施設から程よく離れた位置に、リエルはジュリナに背負われながら立つた。

昼間とは一変して、その街の夜は肌寒い。赤子が凍えてしまわぬよう、ジュリナは両腕で毛布ごと赤子をしつかりと抱きしめている。その真剣な眼差しの先には、自分の羽織つていたローブを着たウェルが、あの施設の門番に向かつている光景があつた。

リエルとジュリナがしばらく息を潜めて様子を見ていると、ウェルは門番を引き連れて駆けていった。

「お！ ウェルの奴うまくやつたな！」

施設の前には誰もいなくなつた。ただ、松明がしきりに踊つているだけだ。

「ほら、ジュリナ！ いまがチャンスだろ？ 早くいくぞ！」

「は、はい！」

リエルの声を合図に、ジュリナはトテトテと足音をたてて走つた。やはり、誰もいないし、気配すら感じ取れない。ひとまず、誰かに見つかる心配は無さそうである。

施設の扉を開けようとしたが、どうにも開かない。よく見ると、南京錠が一個ぶら下がつていた。

「ああ、もう…。面倒くさいな…」

「どうしましょう？ リエルさん…」

モタモタとはしていられない。いつ、あの門番が帰つてくるか分からぬ。後方を気にしながらジュリナは心配を溢れさせた顔でいつたが、リエルは明るい、といつか能天氣な声で笑い、扉に背を向けるようにジュリナに命じた。

「…こうですか？」

ジュリナに背負われたりエルの背中が、施設の扉に平行になつた。

「うん、うん。これでいいよ。」

ジュリナが赤子に目をやつた瞬間に、背中から鉄が落ちる音がした。振り返ると、あのぶら下がっていた南京錠が落ちていた。

鍵が開いたのである。

「リエルさん！　どうやつて…」

「まあまあ、そなあことは後でいいから。な？　早く中に入っちはおう？」

「は…はあ…」

ジュリナは不思議で頭が一杯になりながらも、抵抗感がなくなつた扉の中に入つていつた。

誰もいない。施設はこの国の半分を占めるほど巨大だが、入り口はさつき入つてきた一つだけ。右手には今朝リエルとウェルが会計を済ませたカウンターがある。いまは暗さのためなのか、どうにも殺風景で寂しい感じ。他に何もなく、ただカウンターの先には通路が薄暗く続いていた。

「ジュリナ、あの先が君達の行きたい場所だ。行つたら、もう戻る事は…きっとできない。」

「…はい。」

ジュリナは薄暗い通路に入った。

「これで本当にいいんだな？」

「…はい。もう…私は…」

通路はすぐに頑丈そうな扉にぶち当たつた。扉はやはり開かない。

「もう…迷いません。」

開かない扉に、ジュリナは力強く云い放つた。

「…わかった。じゃあ、この先に…」

リエルは再びジュリナに背を向けるよう云い付けると、扉は背を向けた瞬間に重い音を鳴らした。

驚きと好奇心、それがジュリナの首を勢いよく振り返らせた。

ジュリナが背負っているリエル。そのリエルの背中には、白く浮かびあつた光を放つ、翼があつた。

思わず見とれてしまふほど、美しい。

翼は今にも飛び立てそうな大きさだった。ジュリナとリエルを包み込むのは、容易だということが予想できる。

翼は扉に触れただけのようだった。反動がまるでないのだ。それどころか、リエル自身、何をそんなに驚くことがあるのか、と言いたげな表情であつた。

「ほらほら、いこう？」

リエルは翼を光の粉に変えながら笑顔を作った。そんな笑顔で言われては、さつきの翼に触れることもなんだかバカらしく感じてしまう。

「は、はい。」

扉の向こう側には、月明かりがやつてくるトンネルがあった。ライドで駆け抜けてきたトンネル。そこを抜けて丘の上にある木を通り過ぎた頃、もうケケラの街は見えていた。皆、静かに寝静まつていた。

人が起きている灯火は、酒場にしかない。

「あそこだな。」

「…はい。」

まだまだ、風は冷たくてかなわない。でも、肌を痛めつけるような風じゃない。

ジュリナと赤子が向かおうとしている未来も、きっとこの風のようなのだろうと、リエルは思った。そして、その未来を想像すると、なぜだか楽しくなるから不思議なのである。吹きだしてしまって、やはり考え直すと、リエルはジュリナがつらやましく思えてしまう。浮かない顔は似合わないのに。

「…ついた。」

いきなり後ろからウェルの声が聞こえた。多少驚きはしたが、問題はない。追っ手はひとりもない。

ウールにリエルを返すと、ジュリナは深々と頭をさげてきた。

「本当に…ここまでありがとうございました。」

感謝されてしまった。だが…

「でもな、ジュリナ。きっとコレからが大変なんだよ。誰にも頼ることなんかできない。その子をちゃんと育てるんだ。あの、近くで遠かつた街でね。」

ジュリナの目は堅い。

リエルとウエルは丘の上で街に向かうジュリナを見つめていたが、すぐにトンネルへと向かった。ジュリナがケケラの門を前にしたとき、振り返ったが、そのとき丘の上には木が優しく手を振っているだけだった。

門を開けた。木製の古びた門で、月明かりでほのかに明るく青い。体で懸命に押し開けると、ひつそりとした街の先に、にぎやかな声が漏れる酒場の光が、微かにあつた。

「止まれ。」

施設から出た途端、数十の矛先がリエルとウールの二人に向けられていた。矛先の中には、さきほどウールを追つて息を切らした門番の必死な顔もあつた。

「お前たち、一体何をしていた?」

声の主は矛の向こう側から聞こえる。

腕を後ろでキツチリと組み、陰険そうな眼差しでこちらを睨んでいる。

鼻のすぐ下には、ぐるっと細かくトグロを巻いた趣味の悪いヒゲが設けられていた。

身なりが他の兵隊とは違つところをみると、やはりそれなりの立場の者だろう。

ヒゲをいじりつつ、男はズイッと前に出てきた。

「どうなんだね? 答えたまえ。」

話方も偉そうだ。

「ああ、いひこひの、面倒くさいよね…」

「…うん。」

嘆息してリエルが云い、ウェルはそれに賛成してうなずいた。

「何をブツブツと？ 早々に答えたま…」

ヒゲをいじつたまま男は淡々とした調子で云うが、それをウェルは無視した。リエルを背中に背負いなおし、一人の顔が前後入れ替わる。

「どうしようか、ウェル。ライド、取りに行こうか？」

「…うん。」

「おーおいおい！ なんて無礼な奴らだ！ 構わん！ 捕らえよ…」
いじつていたヒゲから手を放して、号令をかけてきた。田の前にある矛が一斉に動こうとした。

カチン、コチン、カラーン、チチチ…。

矛の先にある鋭利な金属部分が、すべて地を叩く音…。

兵隊が手にしているのはただの棒切のみとなっていた。開いた口がふさがらない。文字通り、兵隊はもれなく口を開けて驚愕していつたが、それは矛が落ちたからではない。目の前いるリエルとウェルを包む、ほのかに輝く、白い翼が唐突に現れたからである。

眠気を誘うような風が、リエルとウェルの周囲をしきりに回り、遊んでいる。

風の音しか聞えない、この場の空気のように、ウェルの表情は静かで、後ろにいるリエルもまた、穏やかに瞼を閉じていた。

翼はリエルを軸に、のびのびと羽をのばしていった。翼が動くたびに、さわやかな風はウェルの長髪を浮き上がらせる。

「さ、ウェル。もう行こう？」

「…うん。」

ウェルが地面を軽く蹴つた。

翼が空間を捕まると、一度だけ羽ばたき、二人は空の彼方まで

瞬きのうちに消えてしまった。

残された兵隊達は、皆がため息をついた。

月明かりが染み込む夜に、棒切れが落ちる音。空には星と、月と、月の光のような翼が羽ばたいていた。もう遠すぎて、声もどかないだろう。やがて空を見るのをやめると、あの翼の羽が何枚か落ちている。

一人の兵隊がそれを手にして凝視したが、その羽はやがて光の粉となり、空氣に混じつて消えてしまった。

ウェルは右手が痛かった。仕方なく、ライドのハンドルを左手だけで持ち、短い草の茂る草原をじっくりと走っている。

「ちょっとウェル。両手でハンドル持つてよ。じゃないと危ないだろ？」

ウェルの胸元から助手席に移動させられたりエルが、口を尖らせながらぼやいてくる。

「おいウェル！ 聞いてるのか？」

「…聞いてる…。」

昨夜、テティから飛び立つた後、二人は荷物を取りに隠れて戻ったのだ。しかし、如何せん再び正門から出て行くことはできない。ましてやライドがあるのである。結局、二人がとつた措置は、ライドをウェルが持つて空から逃亡を計るという無造作な行為に及んだ。それがウェルの右手が痛い原因であった。その作戦の首謀者は、もちろんリエルである。逆らわないウェルもウェルだが、そんなことを今更とやかく云うウェルでもない。

快晴の空のもと、二人を乗せたライドは、その足取りを軽快なものにしていた。

ハンドルを握るのは、やはりウェルの左手だけである。一人はしばらく黙り、風の音に耳を傾けた。ふと、リエルは呟いた。

「なあ…」

「…うん」

草原の先を見据えたままウェルはアイジチをうつた。ややスピードがあちる。

「ウェルはさ、テテイとケケラ。どっちが…綺麗だと思った？」

「……」

「俺はね、ケケラが綺麗だとは思わない。でも、テテイが綺麗だとも…絶対に思えないよ。」

「……」

「ウェルは？」

「……私は…」

リエルをチラリと盗み見て、静かに微笑んだ。

「…リエルと同じ…」

「…だと思つたよ。」

リエルはニヤリと子供っぽい含み笑いで答えた。

ライドのキユルキユルと何かが回転しているような、独特のウンジン音が増し、草を多く巻き上げた。

ちぎれた草は空に舞い、やがて落ちていいくだらう。ときには風に吹かれて、再び舞い上がるだらう。

妹はリエル。

ケラセルフィ・アーク・リエル。

姉はウェル。

ケラセルフィ・アーク・ウェル。

いまだ、旅の途中である。

永久に続く、旅の途中である。

第一話 「安定の下」

《昼・草原で》

「おや？ こんなところで何してるんだい？ お嬢さんたち。」
不意にリエルとウェルに話しかけてきたのは、老人の声だった。
目が慣れてくると、顎に貯えた白く々としたヒゲが印象的な、おつ
とりとした老人が目の前にいることが分かった。

その老人は、ウェルが乗るライドよりも大きな荷台の上に座り、目
を丸くして姉妹を優しさのこもった瞳で見つめていた。
「いや、俺たちは、これからまた旅にでるといひだよ。 おっちゃん
は？」

リエルは助手席から覗き込んでそう答えた。

その白ヒゲの老人は、これから品を仕入れにある国へ向かう途中
だという。そこであわよくば人稼ぎしようと企てていることを、嬉
々たる声で二人につらつらと聞かせた。

「そうだ。よかつたら一緒にどうだい？ 旅は道すれ、荷馬車空な
ら恩売りなつてね。旨い飯なら食わせてやるよ？」

老人は荷馬車に荷台にある豊富な食料を親指で差しながら云つた。
リエルは朗らかに微笑み返し、ウェルは荷馬車と並んだライドの
エンジンをかけた。

白いヒゲの老人は鞭を手にすると、一つ音を立てて馬を走らせた。
ライドもその速度に従い、平衡して走り始めた。

「安定の下」

「なあウェル…」

リエルは目の前のある情景に驚愕していた。天にまで届きそうな大
きな塔が、リエルとウェルの目の前に存在しているのである。ウ

ルも見上げて、

「……大きいね……」と表情を崩さずに、つぶやいた。

「……ウェル、本当にそう思つてるの？」

リエルが目を細くしながら振り返つて疑いの目を向けると、ウェルは一度小さく頷いただけだった。

リエルはウェルの胸元にさげてあるリュックに納まつていた。首から上をチョコンとつきだし、小動物のような顔を今一度、驚愕したばかりの塔に向けた。

仰いで観るのが苦しくなるほど、その塔は巨大で、小さな国の領地に刺さるように建つていた。ライドを走らせれば、その塔の大きさが、近づくほどに増していく。

見張り台にしては大きすぎるし、城にしては細すぎる。頂上には、なぜか旗が一本、音もなくヒラヒラと風に遊ばれ、その塔の体も風に揺らされているように、フワリフワリと微かにリズムを刻んでいる。

草一つ見当たらない大地に砂煙をたてて、一人を乗せたライドは塔がさむる国の城門の前に到着した。

木を縄で縫い合わせた門が一つだけあるが、見るからにひ弱そうな大きいだけのものである。

周囲を見渡してみても、小さな空き家が一つ在るだけで、空き家といつても、あまた角材を駆使して作った事が容易に想像できる陳腐なものだ。関所もない。

通常、関所を通して部外者は入国の許可をえるので、リエルとウェルはどうしたものかと一考を余儀なくされたが、そこは計画性のないリエルのする事である。やはり、

「とりあえずいつてみよつー」の一言で事は丸く収まるのであった。

ひとまず、ウェルは先ほど見かけた小屋の中にライドを停めておいた。

小屋の中には何もなかつたので、何のために使うものなのか全く解せない。ただ、その小屋の壁には、所々黒いしみのような者が点々

とこびりついていた。

例えるなら、血潮のようだつた。

門のすぐ脇に勝手口のような小さな扉が、申し訳無さそうにあつた。そこには「入り口」とだけ走り書きされている。ウェルがその扉を、横に音を立てながらこじ開けようとしたが、いさか立て付けが悪い。騒がしく音を鳴らして開けようとするが、なかなか開かない。やつとのことで腕が通るほどを開けることができる始末である。終まいに面倒くさくなつたウェルは、半歩下がつた刹那、その微かな隙間めがけ、横にスライド扉を綺麗に蹴り抜いた。

扉は、先ほどまでモタついていた事が嘘のように、素直にスライドして開いた。

すると、リエルとウェルの前に通行人が目を丸くして歩みを止めている光景が目に飛び込んできた。

ガヤガヤと瞬く間に人だかりができるが、リエルとウェルにとつてその事はどうでもいいことのようであつた。

扉を丁寧に閉め直すと、ウェルは冷静沈着な相貌を保つたまま、人の波を掻き分けることもなく、すり抜けて人々の中へと溶け込んでいった。

町は外観の通りやはり狭苦しい印象をうけた。店や家が押し込まれたように隣接し、見ているだけでこちらが窮屈になつてくるが、人々は以外にも朗らかに、笑顔で生活を送つてゐる。

リエルとウェルは宿を探すために、塔を中心として駒のよつに建国された国の街を歩いて回つた。

リエルが昼食のハムサンド（食べ物。肉に粉末状の小麦が挟まっているもの。）を購入した際に、

「この辺にさ、宿屋ないかな？」と販売員に質問を投げかけた。販売員の青年はリエルの事を不思議そうに眺めていたので、吃驚して高い声をあげた。

「え？ ああ、宿屋ですか？」

「そう！ 宿屋！ どこかにないかなあ？」

販売員の青年は空を見つめて、どこにあつたかなあと言わんばかりに思い出していた。

「うーん… この辺にはないけどねえ、このままずっと真っ直ぐ行って左を見ていると、ハープっていう宿屋があるはずだ。そこに行くといいよ。最近は行商人も来てないし、簡単に宿をとる事はできると思うよ。あと、それまでにきっとこの街の中心にある ボルムに通じる道が途中にあるかも知れな…」

「ボウムってなんだ？」

口を挟んだのはリエルだった。販売員の青年は口をへノ字に曲げ、すぐに手を打つて、

「ああ、そうか。君達は今日入国したんだったね。知らなくて当然だ…。」

「で？ で？ ボウムってなに？」 リエルは興味津々と言つた様子で聞き直した。

「あのね、ボルム はね、この国のシンボルなんだよ。この国がこの国である象徴。この国の建国以来、この地の人間はあのシンボルのためにがんばってきた、といつても過言じゃないね。世界のどこにいても、この国がどこにあるのか解るようにな。そんな願いを込めて作つたんだ。もちろん、いまでも更に高くするために頑張つているんだよ。それに、建設費は国の利益が余つたものを使うようにしているしね。あそこまで塔が高くなつたのは、俺の親父や祖父が頑張つたからなんだよ。誇りなのぞ。」

「へええ…。」

感心にも似た声を上げ、リエルは仰ぐまでもなくすぐそこに君臨する塔、ボルムに目をやつた。細長い、不安定な塔だというこ^トしか、リエルには解らなかつた。

販売員の青年に言われたとおり、ハープという宿屋は確かにあつた。というか、見つけずにはいられなかつたと言つた方が正しい。

綺麗に飾り付けられたハープが店の前に置かれてあり、店内にもハープが数個ある店だ。だが、お世辞にも趣味のいい飾り付けだとは、リエルもウェルも思うことができなかつた。

しかし、屋根があるだけましだ。もちろん限度はあるが…。それがリエルの考えであることに変わりはないし、それに反対するウェルでもない。

店主に聞いてみれば、泊まるのはリエルとウェルの一組だけだということらしい。

姉妹は一つ返事で部屋を借りた。

それも高級な部屋を一部屋。リエルとウェルは宿に荷を託し、ギターケースを手に街へと出かけていった。

街はさほど広くなくて、日が落ち始めた頃には一周して宿に帰つてしまつた。リエルとウェルは音楽を催し金錢を頂戴しようと企てていたが、なにしろ敷地がまず無い。どこかにあるまいかと探し回つた挙句、結局宿屋に帰つてしまつたというワケである。

「…はあ…どこも空いてないな…ウェル、仕方がないから…もう一回りしよう?」

「…うん」

ウェルは一度頷き、静かに歩き始めた。特にあてがあるわけでもないので、二人は街を徘徊せざるを得なかつた。どこかが昼間とは景色が変わつていればいいのに、と可愛げな願いを胸に、リエルとウェルは赤く染まりはじめた空の下、肩を落として歩き続けた。

ふと、ボルムへと続く路地が、リエルの目に飛び込み、ウェルの歩みを止めた。

冷たく暗い路地。

ネズミが走る足音が聞こえそうな空間。

人一人がやつと通ることができる細い道がそこにはあつた。

このとき、リエルの胸中にはひらめきに近い私意が浮かび上がつたのである。リエルはしばらくこの路地を見つめていたが、やがて口を開いて、

「…ウエル、行つてみようよ…もしかしたらあの塔の下、住宅になつてゐるのかもしれないよ？　だとしたらお密さんも…」と、しずかに言い切つた。ウェルに拒否するといつも選択肢はない。といつかも持ちえていない。

リエルとウェルは路地の中へと、身を隠すように入つていった。

静かな路地がつづき、ウェルの背中にはまだ街の明かりが差し込んでいるが、やがてその明かりも弱るように消えていく。

目が路地の暗さに慣れていくのがわかると、リエルはその路地の先

にあるものが一体何のか拝見しないわけにはいかないという、どこか使命感こえた心境になつたのである。

か仕合戦に備へ心地にがたのつるぎ 徐々に周囲の空気が冷たくなつていく。

風がリエルとウェルの前髪を冷やし、いよいよ迫った路地の出口と思しき隙間にたどり着くと、そこには

卷之三

人がいた。

何人の人が暗く光の届かない ボルム の付近に崩れそうな住処を構え、生きていた。その住民は次々とその住処らしき建物から顔をだすと、途端に首を引っ込めて「恐ろしい…」と呟くばかりである。外には、数人の大人たちが夕飯の支度をするために鍋を囲んでいる最中だったが、このみすぼらしい、縮こまつた人間らしい生き物が今は隅に集まつて怯えている。肩を震わせ、頭を覆い、ぶつぶつと呟いてリエルとウェルに恐怖していた。

「どうかお助けください…鞭で叩かないでください…」怯えきつた声で数人の大人たちが横目でそう訴えてきた。もちろん隅で怯えな

がらである。こちらに歩み寄つてくる者など一人もいない。

リエルは困惑して、言葉をさがしたが見つからないといった様子でウェルを見上げると、ウェルはリエルと目を見ていつものように頷いた。

「…みなさん。」ウェルの声が、冷たい空気をより冷やすように響き、その声は妙に人々の心に届いたようだつた。

隅で怯えていた人々や、住処に隠れた首が不規則に上がり始める。「…私達は音楽家です…この手に持つたものは、ギター…という楽器です…この楽器で、私達はあなたたちに音楽を披露しにきました…どうか邪魔にならないのなら聴いてください…」そういう終えると、ウェルは近くにあつた形のいびつなバケツを力カトで軽く蹴り、ひっくり返して腰を落ち着かせた。

「ちょっとウェル！ そんなのこつちは聞いてないよ！」驚いたのはリエルである。ウェルは物静かにリエルの唇に人差し指を添えて、「さつき言つたよ…」とやさしく言うだけだった。ポカンとしたりエルはそのままウェルの胸元から下ろされ、ウェルの座つたバケツの足元に置かれた。ウェルは素早くギターケースからギターを取り出し、しなやかな腕の中に寝かせて、瞳をゆっくりと、閉じていつた。

「…………」

水を打つたような空氣だ。

遠くから、あの街の音が聞こえる。

この空間だけが、まるで無音になつてしまつたようで、隔離されたようで、でも、ちつとも寂しくなくて、満たされている。

遠くの音も、声も、光すらもいらない。

この冷たい住民の一人一人の心が、いままさに、リエルとウェルに捕まえられていく。

静けさの中で、ギターが、柔らかくて、体にしみこむような音色

が、小さな旋律を奏でていくと、それに続いて、アゴが浮き上がる
ようなリエルの歌声が、慈悲に満ちた天使の歌声が、人々の心を抱
きしめて、さらに包み込み、あたたかく、痛みがある優しさで愛し
ていくようで、その音と声は、人々の頬を湿らせる。

「…………

音聞き終えた人々は、先ほどとは一変して、怯えてなどいなかつ
た。むしろ、感謝の念を全身で表現するようにリエルとウェルの手
をとつて喜んでくれた。

「いい曲だ……」「すばらしかったよ……」「ありがとう……」
涙で皺くぢやにした顔で、人々は歓喜にわいた。

リエルとウェルは、そこの人々から夕食の誘いを受け、これがあ
りがたく頂戴することにした。貧相な食事ではあったが、さきほど
まで感じていた寒気が、人の集まる暖かさで消えていることにリエ
ルは気がついた。

リエルがウェルに夕食のスープを口に運んでもらい、喜色満面の
笑顔でいると、一人の男が、ボサボサの髪をかいて口から夕飯をこ
ぼしながらリエルに話しかけた。

「それにしてもいい曲だったな、また一度でもいいから聴きたいも
のだ！」

汚らしさにリエルは苦々しく顔を強張らせたが、どうにか笑顔を
つくろい、

「あは……あはは……ありがとう……また次ね……」と力なく苦笑いを繰り
返した。男の口からはなおも夕飯がこぼれ落ちている。

「こらー、音楽家さまが困つておられるであろうー！」

火にかけた大きな鍋を囲んで、リエルとウェルを含めた大勢の人
々がその声に反応し、リエルに話しかけた男を笑った。男は恥じら
いをこめてまた、頭をガリガリとかいでいる。

「音楽家さまや、先ほどはまことにすばらしい一曲を披露していた

だき感謝に絶えぬ。ほんとうにありがとうございました。心から礼をいいます。

「リエルには鍋が邪魔で見えなかつたが、そつ言つたのはこの集落の長ひしきお婆さんだつた。さきほど男を注意した声の主である。腰を丸くして、その姿は鍋を挟むと完全に隠れてしまい、ウヘルや大人の者にしかその姿はとらえることはできなかつた。

ウヘルはお婆さんに首を左右に振つて否定の念を表し、スープをリエルの口に運ぶ。

「…音楽家さまや…」

リエルがスープにした頃に、お婆さんは聊かな声で呟き、ウヘルはリエルの食事をしばし中断する。リエルもお婆さんの話に耳を傾けた。

「…音楽家さまは、ワシらのことなどいつも思ひませんでか?」

質問の意味が、リエルには最初解らなかつた。もちろん、ウヘルにも解らない。リエルが首をかしげると、お婆さんはリエルを鍋の横から覗き見て、安らぎの混ざつたようなため息を落とした。

「わしらは…この国に奴隸として連れて来られたんじやよ…ほんの、数十年前のことじや…」周囲のざわめきの灯火が一つずつ消えていった。

「このヘンテコな塔が、そのときには半分ほど高さしかなくての…それを更に高くするために、わしらは奴隸としてこの国に買われたんじや。この国人間は外側の街で暮らし、わしらはこの内側の街で毎日毎日塔を作つて暮らした。過労から、死ぬ者の出たね…とは言え、わしらには何もできなかつたから…いまの塔の建設が中止されるまで、本当に長かつたと思つよ…」

鍋をかけた火が躍り、火の粉が星のよつて空へと昇る。

「…なんで中止されたんだ?」声を低くしていつたのはリエルだった。お婆さんは瞳を閉じて口を固く結んだ。

「…わしらにわからん。ただ、ある日突然止めさせられたんじやよ。それから…わしらは毎日街に出ては汚い仕事をして生きているよ…」

息がつまりそうな話しだったとリエルは思った。同時に、この人々に同情し、未熟な自分を呪うように俯いてしまった。

ウェルの細い指がリエルの頭を撫で、その手つきにリエルはしばしの安らぎを感じていたが、途端にボサボサの髪を有した男が立ち上がつて、この息苦しかった空気をどこへと知れず吹き飛ばしてしまった。

「おれ、あんた達の音楽、もう一度聞きてえな！」

「俺もだ！」

「私も！」「僕も！」

次第に欣喜雀躍していくと、リエルの暗かつた顔にも驚喜に出会い、つたように無意識にほころびを見せていた。

ウェルはギターを取り出し、心踊る、身が跳ねる音色を生み出し、リエルもそれにあわせて赤子が跳ねるように小躍りしながら、音の高い楽器の口真似をして更に音色を歌わせた。

人々と踊り、歌い、飛び跳ねて、リエルとウェルは疲れたままに、夜が更けてから宿に帰つていくのであった。

宿の帰る途中、真夜中にも関わらず、リエルとウェルが入つてきた門の近くで松明がいくつも灯されていた。その松明の明かりで、門の周辺は昼間のように明るく、集っている人の顔がはっきりと見えていた。リエルとウェルは物陰に潜伏し、その集団の様子をこつそりと眺めた。

「ねえ…ウェル、アレなんだと思う?」リエルが指定したのは、数人のフードをかぶつた者がもつ紙切れのようなものだつた。紙には文字が記されており、松明の向こう側の蔭る場所から数人の中まだ稚い顔立ちの子供が男女問わず連れられてきた。

フードをかぶつた紙を手にした男は、その子供を点検するように一人ずつ眺めたかと思うと、一発ずつ頬を引っ叩いて「次…」と低い素氣無い声で言うのである。そのフードを被つた男数人は、次に並んでいる子供の頬に手をのばす。

叩かれた子供は今にも、膝から崩れてしまいそうだが、他のフードを被らない男に迫られてぐつと辛そうに唇をかんでいる。

「なんだあいつらは……ひどいよ……。」

「……次……」

パシツ！

「……次……」

バシツ！

リエルの心からの慨嘆も空しく、子供は一人一人類を引っ叩かれていた。

通りぬけていくような風に松明が吹かれて揺れ動いた。

門がひとりでに開いていく。上にある巨大な綱が時間をかけて巻き上げられていき、ロープをたどつた先には、門の脇の車輪を二人掛けかりで巻いているのが確認できた。

門からはゾロゾロと赤いフードを被った人間が、荷馬車を引いて入って来た。その赤いフードを被つた集団は、子供を物色し始め、服を脱がしたり、手を上げさせてみたり、奇妙な儀式的なことをさせた拳句に、どこからか持ち出したハンコを全員について周ったのである。

ハンコをつかれた子供たちは、肩を震わせて固まつたまま、荷馬車に導かれていく。

「どうも……今回の商品は質がいいですな。小屋を使うまでもなかつた。」

その荷馬車の前で、赤いフードの男が云つた。恐らく赤いフード集団の責任者かなにかなのだろう。その男は、子供を引っ叩いていた男と固い握手を交わすと、互いに得たりやおうと含み笑いをこぼし、子供をすべて荷馬車に乗せたことを確認し終えると、赤いフードをかぶつた集団は再び国を出ようとまばらに背を向けて歩きはじめた。

「坊や！ 坊や！』

漆黒の闇から女の声が突き抜け、声を限りに疾走してくる女がい

た。その疾走は、あまりにも無様で醜いものである。今にもつままずいて、転倒してしまいそうな頼りない走りだ。

荷馬車に乗り込んだ子供の一人が立ち上がり、即座に荷馬車から飛び降りた。男の子である。

男の子は懸命に走り、顔を寂しさでつぶしながら母親に抱きついた。そのやり取りを誰一人として止めようとしなかった。

「坊や……！　ああ…坊や…」

「かあさん…かああさん…行きたくないよ…ぼく…行きたくないよお……」

松明はしきりにゆれていた。まるで親子を急かすようにコラコラと。

親子は氣にも留めずに強く抱き合つた。

「坊や……すまないねえ…」

「母さん……かあ…さん…」

嗚咽をもらしても、涙で顔が痒くなつても、男の子は母親を呼び続けた。

何度も。何度も。男の子は母親を呼び続けた。

男の子の後ろに、松明を移すように怪しく光る鋭利な光が近づいていく。親子は黙つたまま動かないのだ。まるでそうなることが解つていたかのように。短剣を手にしていたのは、先ほど握手を交わし、少年を叩いたフードの男だ。どうやら、この商売を台無しにされかかつた事に、憤り以上の憤りを感じているようである。その形相は静肅に凍てついているが、それは殺氣立つている以外にない。男の腕が天をさし、歩みを男の子のすぐ後方付近で止め、死にかけた虫を見下したような眼で立ち尽くした。

「かあ……さん…かあさん…」

母親は男を仰ぎ見ると、子を覆い、身を挺して守りつとした。

「どうか…どうか…どうか…」

苦しい。そんな事すら当てはまらないよつて、母親は苦境に耐えか

ねている。男は一つ、ため息と共に肩を落とすと、

「……逝け」と一言だけ。

短剣で風を切り、力いっぱい振り下ろした。

音はない。血もでない。ただ、遠くで短剣が地を触る、鼓膜を震わせた音だけがする。

闇よりも黒い、漆黒よりも濃い、ウェルの黒々とした影のような長髪が、親子を守護するように風になびいていた。

ギター・ケースが男の顔面をとらえ、振りぬかれていた。わずかに松明の光が届くところでうつ伏せになつた男の意識は、そこには無いことが見て取れる。

ウェルはゆっくりと視線を取り囲む集団に送り、親子が逃げ出したのを察すると、すぐさまギター・ケースに勢いを乗せ、フードを被つた集団へ乱暴に投げ飛ばした。

ギター・ケースが混乱した回転をみせ、フードを被つた集団を搔き分けていく。

ギター・ケースは一人の男をかすめただけで、重々しい音を鳴らし寝そべるが、壊れるような様子はない。まるで鋼鉄が地面をかくような音がなつただけだった。

ウェルはすかさずワンドースのスカートをたくし上げ、太ももに忍ばせたナイフを数本手にとる、と同時に、ぶら下げたリエルを背負いなおした。

集団のうち数人が、ウェルに休む間を与えぬよう、腰に忍ばせた短剣を手に飛び掛るが、攻撃は当たらず、的確にウェルのナイフは男達の足の親指を切斷していった。

赤いフードを着た集団は、逃げるよう門から逃げていく。ウェルは逃がすまいと追うが、道をすぐに場内の集団に阻まれてしまつた。

「どけよ!」リエルが代弁するように言つたが、聞く耳を持つ者など

いるはずもない。集団は取引相手が脱出したのを見るや否や、全員でウェルに攻撃を仕掛けてきた。これにはさすがのウェルでも、どうこうできるものではない。避けることで精一杯である。しかし、ウェルは見事に全員の攻撃を踊るように一撃ももらうことなく、踊るよう避け、汗一つたらさない。

もうとも、四面楚歌と化したこの状況で、分が悪い事は必死である。ウェルはリエルを軽く叩いて合図を送ると、リエルは息を大きく吸い込み、ウェルは急に逃げる足を止め、耳を完全に塞いでしまった。集団の男の一人がウェルに向かつて走り、至近距離にまで迫る。男が短剣を振りかざした、その瞬間、

耳を引きちぎられるような声が四方八方を構わず襲いはじめた。窓は割れ、砂が弾み、耳の鼓膜を傷つける。至近距離でこの音を耳にした男は、耳を押さえてもがき、形を壊した言葉を発して泣き叫んでいた。おそらく、鼓膜が裂けた以外にないだろう。

ウエルはその隙に逃亡を図った。途中、投げ放つたギターケースを素早く手にとつて。集団の男達はおぼつかない足取りでどうにか追いかけてくるが、到底追いつけるはずはない。

そこに、路地から顔を出して手招きをする一人の老婆の姿があることに気がついた。老婆はあのボルムの下に住む、お婆さんだつた。

「ほやく…！」机のちへ来な！」必死に手を振り回してお婆さんはリエルとウェルを路地に招き入れた。後方からはあの集団が夜道を駆け回る足音が、路地を通りすぎ、離れて行く。リエルとウェルは胸を撫で下ろし、互いに大きな深呼吸を設け、お婆さんに招かれるまま、路地をゆっくりと歩いた。

「お婆さん、本当に助かったよ。」ウヘルの後ろからリエルはお婆さんを覗き込んだが、お婆さんは振り返らずに、手をチラチラと振

り、明るい声を返した。

「いいってことよ、あの音楽の礼や。」

リエルとウエルと、お婆さんはそれから黙つてしばりく細く続く路地を歩いた。思ったよりも道は多岐に分かれており、リエルとウエルが最初に発見した路地とは比べ物にならないくらいこの路地は入組んでいた。光の一つも感じることの無かつた路地を抜けると、先ほど皆で囲んでいた大きな鍋は姿を消し、焚き火の跡から煙が立ち昇つている光景が飛び込んでくる。

そこにはリエルとウエルが夕食を「」馳走になつたあの広場だといふことが、憶測ではあつたが理解することができた。お婆さんは幽霊のように足音もたてず、リエルとウエルの前に立ち、向き直る影だけを見せた。

「…いやね、先ほどの耳を痛く切りつけようつな音が街の方からしたものですからな…見に行つたところ、あんたらがなにやら逃げているようだつたのでな…わしさこゝこへかくまつた訳じや。」

「そつだつたのか、いや、こつちは助かつたよ。でも、あれは何かの儀式か何かなのか？俺にはいい具合には見えなかつたけどな…実際、俺とウエルはこうしてやり過ぎちまつたみたいだけど…」

お婆さんは何か知つていて、リエルの言葉を聞くなり咳払いを一度設けると、縫い目のような唇を小刻みに動かし始めた。

「…あれは…この国が、夜になると始める闇の商売なんじや。」

「闇の…商売…？」

かすれた老人特有の声はリエルにも出せない声で、闇を保持しているかのようだつた。あまりの暗さに、リエルはそう頷いて答えることしかできなかつたのである。

お婆さんは話を続けた。

「そう…これは闇の商売。ただ…この国がやつとる。この国が。もはや、闇の商売とはいがたがね……この国は、できの悪い子供を他国に奴隸として売りさばいているんだよ。どんなに頑張っている子供でも、頭が悪いと判断されるとあのザマヤ。その金は、この塔

を建設する費用に当てられているようだがね……馬鹿げた話しさ……」お婆さんの黒いシルエットが、濃厚なため息を放っているのがわかつた。

「……この国ではね、そんなことが何年も続いてるんだよ。わしらもここに来て、この国を哀れんだ事は数知れぬ。じゃが、わしらはどうにもできんのだよ……なにか……そう、なにかきつかけがあれば、わしらも……」言葉はそこで途切れ、お婆さんの影は一棟の住居へと踏み出した。

リエルとウェルがついていくと、お婆さんはその中で寝るように指示してきた。ありがたく二人はその住居に入るカーテンを裂き、お婆さんに礼を言つと、お婆さんが極微に笑つて見せたように、リエルとウェルは感じた。

『パンツ』

そんな銃声が二人の眠りを妨げた。リエルとウェルはその音により起され、自分たちが眠っていた住居と思っていた部屋は物置だということが解ってきた。それよりも何よりも、リエルとウェルは外から聞こえたその銃声の方が、気になつて仕方がなかつた。そつとカーテンをウェルが小指でずらし、外の様子を窺う。

昨日、リエルとウェルを追いかけていた男達の顔ぶれが離れた位置に点々と在る。手には銃器が携えられ、真つ直ぐに地と平行して構えられていた。非常な銃口からは煙が描いたように生じて、八人ほどの男達の足元には、昨夜のお婆さんの亡骸が横たわつてリエルとウェルを見つめていた。

「もう一度だ……もう一度だけ聞く。昨日入国した者はいないのか？」

銃器を持つた男達の中で一人だけ肩の位置に勲章をつけた男が叫喚呼号すわけでもなく、棒読みが如く言つた。広場に集められた人々は、怯えきつて身を緊張させるばかりだ。

「いないのか……じゃあ、仕方ない。」勲章をつけた男は顎で空を切り、ズカズカと一行をひきいて広場から姿を消していく。途端に

泣き声、喚き声が広場に消沈した空気を下ろしていった。ウェルがリエルを背負い住居から出ると、真っ先にお婆さんの亡骸の側に歩み寄つた。

人々の視線が一人に注がれる。中には憎しみに満ちた、頬にささるような視線もあつたが、リエルとウェルは瞼をとじて、肅々としてお婆さんの見開いた眼をそつと閉じる。

数分間、二人はそのまま沈黙を守ると、ウェルは凛として立ち上がり、背中に背負つたりエルと共に、ボルムへと近づいた。ボルムはやはり細く、大人が両手を広げて四人ほどで囲めば事足りるようなものであつた。リエルの体が白銀に光り、背中から閃光が放たれた。

リエルの背中に、光沢のある翼が現れ、ボルムの足元を切断するかのように横に翼を打つた。

なにもおきない。

羽が数枚、風にのつただけだつた。

リエルは翼を大きく一度広げると、その翼を引き込むように背中に収めていった。リュックの裂け目に、翼が巻尺を思わせて消えていく。背中には、翼の跡かたすら残らなかつた。ただ確かに、リエルとウェルを覆うように、羽は浮かび上がつていた。何枚も軽く、何の抵抗もなく。

広場の人々は悲しみも忘れ、これまでの一部始終に見入つていて。閑散した広場に向けるように、リエルは背を見せたまま口を開く。

「お婆さんが…昨日言つてたんだよ…なにかきつかけがあれば…つて。」

その台詞を置いて、リエルとウェルはあの冷たい路地へと姿を消していく。手にはギター・ケース。それだけを持つて、なんの滞りも、阻む敵も無く、リエルとウェルは国から出ることができたのだった。あまりにもあつさりと出ることができたので、何度も背後を気にしたが、やはり追つ手などの影も見えなかつた。

ライドに揺られながらリエルは振り返り、小さくなりつつある ボルム 眺めた。

ボルム の頂上にある旗は、もう見えない。

「ねえ、ウェル。」

「……何？」

ハンドルをしつかりと握り締めて、ウェルは赤土の道の先を見据えたまま返事を返した。

「うん…あのさ…」

「…うん」

「きつかけ…」

リエルの言葉をかき消して、地響きが起こった。後方からである。ライドを止めて振り返ると、ボルム が奈落に落ちていくように崩れしていくのが見えた。足元から、止めることもできずに崩れていようだ。足元の国は、すでに砂煙に覆われて見えなくなってしまった。

「…なるかもしない。でも…ならないかもしない。それは…あの人たちが…決めること…」

ライドのアクセルを再びふかし、ハンドルを強くウェルは握った。リエルは、もう一度 ボルム を見るような事はしなかった。ただウェルの言葉に納得して、大人しく助手席に座つて朝の風を感じることにした。

ライドが走り始めると、リエルはしばし「きつかけ」について思いをはせた。

あの不安定な塔も、あの国も、住む人々も、自分が与えた「きつかけ」によって、どれほど、何かがかわるのだろうか、と。

しばらく行くと、木陰に荷馬車が一台、昼間の東風にのんびりとしていた。木陰が木々の動きにあわせて生き物のように荷馬車を撫でている。ウェルはライドをその荷馬車のすぐ隣で停車させた。

荷馬車の荷台から何かがムクリと起き上がった。蔭つていたのでよく見ない。

「おや？ こんなところで何してるんだい？ お嬢さんたち。」
不意にリエルとウェルに話しかけてきたのは、老人の声だった。
目が慣れてくると、顎に貯えた白く々としたヒゲが印象的な、おつとりとした老人が目の前にいることが分かった。

その老人は、ウェルが乗るライドよりも大きな荷台の上に座り、目を丸くして姉妹を優しさのこもった瞳で見つめていた。

「いや、俺たちは、これからまた旅にでるところだよ。おっちゃんは？」

リエルは助手席から覗き込んでそう答えた。

その白ヒゲの老人は、これから品を仕入れにある国へ向かう途中だという。そこであわよくば人稼ぎしようと企てていることを、嬉々たる声で一人につらつらと聞かせた。

「そうだ。よかつたら一緒にどうだい？ 旅は道ずれ、荷馬車空なら恩売りなつてね。旨い飯なら食わせてやるよ？」

老人は荷馬車に荷台にある豊富な食料を親指で差しながら云つた。
リエルは朗らかに微笑み返し、ウェルは荷馬車と並んだライドのエンジンをかけた。

白いヒゲの老人は鞭を手にすると、一つ音を立てて馬を走らせた。
ライドもその速度に従い、平衡して走り始めた。
のどかな昼間である。

野道はひたすらに続き、清風が荷馬車よりも、ライドよりも早く走り去つていく。

リエルとウェルは老人からもらつた干し肉をかじりながら、のんびりとして、老人の旅の話に耳を傾けていた。

白いヒゲの老人から、質問が飛んできた。

「君達はなぜ、何をめざして旅をしているんだい？」

リエルは答えた。

「母さんの音楽を探してゐるんだ。まだ見つからないけど、見つける

よ。

「どこカリエルの声は、快活と、希望に満ちているように明るかつた。

妹は、ケラセルフィ・アーク・リエル。
姉は、ケラセルフィ・アーク・ウェルといった。

いまだ、旅の途中である。

永久に続く、旅の途中である。

第一話 「安定のト」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想をできれば聞きたいと考えています。どうかお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0615e/>

ウェルトリエル

2010年10月28日03時10分発行